



深江中学校だより

令和5年2月22日

第13号

文責：校長 黒岩 洋史

【学校教育目標】 ～社会に貢献できる 人間性豊かで しなやかな 生徒の育成～
【スローガン】 時を守り 場を清め 礼を正す

メディア講演会

2月17日(金)の午後は、授業参観と並行して新1年生保護者を対象として入学説明会を行い、その後、「カラダコンディショニング・サンクス」代表の、杉野伸治(すぎの しんじ)先生をお招きし、「目標達成のために必要な生活習慣」と題してメディア講演会を体育館にて開催しました。「子供のスマホのスクリーンタイムを見せてもらえる親子関係づくりが大切」「22時以降はスマホを使わせない」など、スマホが脳に与える影響を考えた具体的アドバイスや、「1日の1パーセント(14分24秒)を子供に提供する」など、適切な親子関係を築くうえで大切なポイントなどについてお話いただきました。私はこれまで、何度か杉野先生のお話を聴かせていただいておりますが、毎回、「発見・納得・感動」の内容で、自身を振り返るいい機会になっています。参加された保護者の皆様はいかがでしたでしょうか?ご自身のため、適切な親子関係づくりのため、そして何よりお子さんのために、できることから始められることをお勧めします。また、今回残念ながら参加が叶わなかった保護者の皆様と、何かの折に、講演会の内容について話題にさせていただければありがたいと思います。

「バイアス」の払拭

私が校長として深江中に赴任して以降、学校経営理念として「共創(きょうそう)」を掲げ、深江中学校の生徒のために、先生方の意見やアイデアを学校経営に取り入れ、前年踏襲にとらわれない自由な発想も生かしながら、よりよい学校づくりを目指しています。その際、壁となるのが「バイアス」と呼ばれるものです。「バイアス」とは、「先入観」や「偏見」などの意味で、自分が仕事上で関わる人や物などに対して先入観をもつ場面で使われる言葉です。教育におけるバイアスとは、「先入観」「固定概念」「長年教育現場で行われてきたもの」「これまでの当たり前」等と捉えることができます。「共創」を経営理念とした改革を行っていく上では、このバイアスを払拭することが重要です。新型コロナウイルスにより生活様式が一変したように、これから先何が起るかわからない予測困難な時代を生き抜く子供たちにもこの考えを持ってもらい、いざという時には、これまでの当たり前や常識にとらわれないアイデアで、自分の道を切り拓いてほしいと願っています。

本校では今、次年度の効果的な学校経営に向け、今年度の反省を生かしながら、実態と照らし合わせて、様々な角度から取組内容等を検討しています。具体的には、行事・テスト・宿題・担任・日課・部活動・校則・業務等の在り方についてです。もちろん、バイアスを払拭しながらも、「子供を中心に据えて考えること」「持続可能な取組とすること」など、視点を押さえた上で検討しているところです。次年度からの変更点等については、機会を捉えて順次お知らせしたいと思っています。その際は、ご理解とご協力をお願いいたします。

子供の褒め方…

ある大学の研究チームが、「子供の褒め方・叱り方が、将来どのように影響するのか」調査・研究を行ったところ、以下のような調査結果になったと発表しました。(学研「教育ジャーナル Vol.16」より一部抜粋)

- ・親に叱られた時に「次は頑張ろうね」と励まされたことを記憶している人は、「どうしてできないの」と叱られた人よりも、自己決定度と安心感が最も高かった。
- ・「罰を与える」ことは、不安感を増すという意味で、よい結果を生まなかった。
- ・親に褒められた場合、「頑張ったね」と努力の過程を認められた人の自己決定度と安心感がともに最も高く、「褒美をもらった」人の自己決定度が最も低かった。
- ・「えらいね」という褒め方は、「頑張ったね」と比べると、自己決定度が低かった。
- ・「罰を与えること」と「褒美を与えること」は、「次頑張ろうね」や「頑張ったね」と言われるのと比較して、長期的な視点で物事を考える習慣や倫理的行動を低下させる結果となった。

私も以前、我が子が小さい頃、なぜできないのかと叱ったり、できなかったことに対して罰を与えたり、逆にできたときには褒美を与えたり…ついやってきた記憶があります。これらの調査結果を参考に、親として、日頃の子供さんへの接し方を振り返っていただけると幸いです。もちろん、振り返りは本校の教職員にも…。